

日系移民社会と日系新宗教

—ハワイの天理教の場合—

高橋典史

はじめに

19世紀後半以来、数多くの日系宗教が世界各地で布教を展開してきた。アジアの植民地地域を除けば、日系移民^①人口の多かったハワイでの布教開始が、多くの日系宗教教団における海外布教の先駆けであり、異文化布教の「ひながた」であったといえる。それゆえ、ハワイの日系宗教とは、日系移民の宗教文化として興味深い存在であるだけでなく、日本の宗教史においても重要な研究対象である。

ハワイの日系宗教についての研究は、おもに宗教研究と移民研究の分野において進展してきたが、双方の研究はそれほど有機的に結びついて進展してきたとはいえ、各々の問題関心から研究を行ってきた。宗教研究の分野では、近年の研究蓄積はそれほどなされていない。一方、移民研究においては、日系移民社会の主流宗教であった既成仏教（ときに神社神道も）とアメリカ合衆国（以下、「アメリカ」）社会の主流宗教であるキリスト教が注目されてきた^②。

しかし、現実の日系移民社会には、既成仏教やキリスト教という主流集団からは周縁化され、ときには抑圧された日系新宗教という宗教集団も存在していた。従来の移民・エスニシティ研究では、宗教を「チャーチ」型のもの（ある社会や共同体で支配的な宗教）として捉える傾向があったという指摘（藤井2001, 166-167）があるように、ある移民・エスニック集団の支配的宗教に過度に注目することは、その集団の宗教文化を画一化・均質化させてしまう恐れがある。それゆえ、本稿では、これまで注目されることの少なかった日系新宗教教団の1つである天理教を事例に、ハワイの日系移民社会におけるマイノリティの宗教の受容と展開の過程を明らかにしたい。

本稿では、天理教がどのような歴史社会的な背景のなかで、ハワイ布教を開

始していったのかを明らかにし、日系移民社会のなかのいかなる社会関係を基盤に展開していったのかを解明していく。そして、天理教がハワイにおいて最も教線を拡大していった20世紀初めの開教初期（1920年代）から、同教が大打撃を受けた第二次世界大戦後の復興期にかけての展開を中心に考察する。

1. ハワイ日系移民社会と日系宗教

19世紀末から開始された、日本からハワイ（当時ハワイ王国）への移民は、当初はそのほとんどが西日本（広島、山口、熊本、沖縄県など）からの出稼ぎ移民であり、若い男性労働者が中心であった。彼らは、ハワイ諸島各地のプランテーションで労働に従事していたが、次第に他の職業にも進出するようになり、親族を呼び寄せる者たちも増えていった。しかし、アメリカ（ハワイ王国は1898年にアメリカに併合）国内において日系移民の増加が問題となり、1908年には日米紳士協約が締結される。それ以降は、新規の労働者移民は制限され、家族の呼び寄せ移民が中心となっていった。日系移民が数多く居住し、大規模なエスニック・コミュニティを形成していたハワイにおいては、同様に日系移民を多く抱えていたアメリカ西海岸ほどの排日運動は起こらなかった。しかし、プランテーションにおける日系移民労働者によるストライキや、日系2世たちへの日本語・日本文化の教育などが批判の対象となっていった。そして、日米関係の悪化と排日的風潮が高まるなかで、1924年にはいわゆる排日移民法が成立し、1941年の日米開戦を迎えたのだった（ハワイ日本人移民史刊行委員会1964）。

当時のハワイの日系移民社会の宗教についていえば、日系移民の95%が仏教徒であったという（島田2003, 33）。そして、移民の多数送出地域である西日本に強い地盤をもつ浄土真宗、とりわけ本願寺派（ハワイ本派本願寺教団）が他の宗教勢力を圧倒した（一説に信者数約10万人⁸¹（中嶋1993, 178））。また、少数ではあったが白人支配者層の後ろ盾を得ていた日系キリスト教勢力は、日系移民社会のマジョリティであったハワイ本願寺教団を中心とした日系仏教勢力としばしば対立した（中野1981, 60）。

ただし、ハワイにおいては他にも、数多くの日系宗教教団が活動を行ってきた⁸²。井上順孝は、日系諸宗教のハワイ開教の時期を3つの「波」に分類して

いる。第1波は、日本からの移民が本格化する19世紀末から20世紀初頭の時期であり、日系移民からの要請もあって、既成仏教の諸宗派（浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、曹洞宗、浄土宗など）が開教し、各地に神社も創設されていった。第2波は、1920年代半ばから第二次世界大戦の開戦前までの時期であり、天理教、金光教、生長の家などの「古株」の日系新宗教や、既成仏教の天台宗や華嚴宗などが布教を開始した。第3波は、1950年代以降の時期であり、主要な日系新宗教の多く（天照皇大神宮教、世界救世教、立正佼会会、創価学会など）が布教を始めた（井上1985）。

2. ハワイの天理教の現況

ハワイの天理教についての調査研究は、管見のかぎりでは、柳川・森岡編（1979; 1981）および井上（1985）のなかの一部でなされている以外にない⁶⁵。それゆえ、天理教のハワイ布教の開始について考察を始めるまえに、同教のハワイにおける現況について、筆者による現地調査をもとに紹介しておきたい⁶⁶。現在の信者総数は2000~2500人でいどであり、その大半が日系人によって占められている。教会数は伝道庁1ヶ所、教会36ヶ所、布教所31ヶ所となっている⁶⁷。活動上の使用言語は英語と日本語が併用されているものの、英語が中心となってきている。天理教は、教団本部のもとに諸系統の大教会（各系統の大教会の下に分教会、布教所などが属する）が集まることで、教団全体を構成しており、ハワイにも数多くの系統の（分）教会や布教所が存在する。ただし、ハワイは海外地域であり、各大教会との密接な交流が難しいため、本部直属のハワイ伝道庁が各系統の教会や布教所を広くまとめている。

さて、井上順孝は日系宗教の海外布教の性格を、「海外出張型」と「多国籍型」に分類し（井上1985, 216-217）、さらに、海外布教を可能にした布教先の地域性を考慮して、「移民依存タイプ」、「国策依存タイプ」、「無基盤タイプ」の3つに分類している（井上1996, 202）。井上による分類に従うならば、ハワイにおける天理教の基本形態は、「海外出張型-移民依存タイプ」であると理解できるだろう⁶⁸。

次節以降、「移民依存タイプ」であるハワイの天理教が、日系移民社会のなかでいかに受容され、展開していったのかを、上述の類型をもとに考察してい

きたい。なお、宗教集団の拡大については、個々の一般信者レベルでのネットワークについて分析することが研究上の理想であるが、資料的制約の問題などの困難があるため、本稿では、信頼できる資料が存在する教会の設置の経緯と教会長の属性を主たる分析対象として、天理教のハワイにおける展開を分析していく。

3. 20世紀前半のハワイにおける天理教の展開

(1) ハワイ開教の背景⁹⁾

近代日本においては、天理教などの新宗教教団に対する偏見や差別があり、国家による弾圧も行われたことはよく知られている。天理教がハワイで布教を開始する20世紀初めの当地の日系移民社会にも、天理教への偏見は存在していた。ハワイにおける天理教の初期信者のなかには、日本の出身地における天理教への偏見や差別から逃れるために、海外へ移民した者が少なからずいたという。しかしながら、既成仏教が圧倒的に優勢であったハワイの日系移民社会においても、天理教の信者たちは偏見にさらされて、みずからの信仰を隠さざるをえないことがあった。そして、信仰の問題が最も顕在化したのが、寺院等への帰属の有無などが明るみに出る葬送に際してであったという¹⁰⁾。

天理教への差別を示すものとして、以下のような事例がある。ある布教師が日本人移民の家を借りて布教活動を行っていたところ、天理教信者であると分かった途端に、その家主に追い出されてしまったという¹¹⁾。このように、日本国内と同様、周縁的・被抑圧的な存在に置かれていたハワイの天理教は、周囲からの偏見や差別のなかで布教を進めていかざるをえなかったのである¹²⁾。

教団本部公認の教会が発足するのは、ホノルル教会が設立される1929（昭和4）年であるが、それ以前から一般の日本人移民のなかに天理教の信者は存在しており¹³⁾、彼らの手引きによって布教師がハワイへ渡っていくようになった¹⁴⁾。例えば、周東系統（山口県）の日本人移民男性A¹⁵⁾や、本島系統（香川県）の日本人移民男性Bのように、ハワイにおいて自発的な布教活動を行っていた者たちもいた。Aは周東支教会（その後、大教会に昇格）の2代会長の弟で教導職をもって国内を布教していたが、1907（明治40）年に同教会の運営資金を得るためにハワイへ出稼ぎし¹⁶⁾、ミルク会社や大工として働くかたわら布教を

行っていた。1920（大正9）年に帰国して家族を呼び寄せて再びハワイへ渡り、布教所を開いて本格的に布教を開始する。また、白羽支教会下の宣教所の「ようぼく⁸⁰」であった福島県出身のB⁸¹は、1905（明治38）年に「おさづけの理」を受けていた。翌年、彼はハワイへ移民し、プランテーション労働者や石割工などをしていたのだが、1929年に本島大教会からの派遣でホノルル教会を設置する上野作次郎・津志夫妻がハワイにやって来ると、熱心な信者となった。1931年に彼は「おちば」（日本の教団本部のある地）に帰って別科に入学したのち、再びハワイへ戻ってオアフ教会を創設する。このように教団本部公認の教会が発足する以前から、移民集団のなかには天理教の信者や布教師が存在していたことは、井上順孝が指摘する第2波の諸宗教の布教開始の要因の1つである、「宗教生活への潜在的欲求」を例証しているといえるだろう⁸²。

また、移民集団内における潜在的信者の存在とは別に、日本国内においても天理教のハワイ布教への要請は高まっていた。天理教は、1896（明治29）年の内務省の「訓令」（天理教の取り締まりを強化することを目的とした、いわゆる「秘密訓令」）により、国内布教が困難になっていた（金子1992, 146）。そこで、当時の天理教の教団管長であった二代真柱の中山正善は、海外布教の拡大に備えるべく天理外国語学校と海外伝道部を1925（大正14）年に設置し、翌年の教祖四十年祭において海外布教の気運を高揚させた。

また、各系統レベルにおいても、海外布教に熱心なものが現れていた。本島大教会長であった片山好造⁸³は、教団本部が海外布教の方針を打ち出す以前から海外布教に熱心であり、アジアからハワイ、アメリカ、ヨーロッパまでをも射程に入れた布教を積極的に進めていた（飯田1974, 23-26）。そして、本島系統で福岡県出身の上野作次郎・津志夫妻がハワイへ渡り、1929年にハワイ初の教団本部公認のホノルル教会を設立する。このように昭和初期の日本の教団本部および大教会においても、海外布教の気運は高まっており、その流れのなかで教団本部公認の教会がハワイに設立されるのである。

以上のように、天理教のハワイにおける布教開始の要因としては、第一に、日系移民集団のなかに潜在的信者が存在していた点、第二に、日本の教団本部および大教会において海外布教の気運が高まっていた点があげられるだろう。

（2）日系移民社会における教線の拡大

正式な教会設置後から第二次世界大戦開戦までの天理教のハワイにおける教

会数の増加は、大きく3つの時期に分けることができる⁹⁰。第1期はホノルル教会設置直後に設置された教会群、第2期は1933年の二代真柱のハワイへの来布後に設置された教会群、第3期がアメリカ伝道庁設置後から大戦開戦前までの時期に設置された教会群である。本節では、それぞれの時期の教会設置の経緯に注目することにより、各時期の教会設置の特徴を明らかにしていきたい。

ホノルル教会の設置後では、1931年における本島系統の教会設置が顕著である。まず、尾道系統の分教会長の息子である広島県出身の日本人移民男性C（ハワイ島ヒロにおいて農業に従事）からの要請により、本島大教会から派遣された鹿児島県出身の男性布教師によってヒロ教会が設置する。また、片山好造の命により本島大教会から派遣された男性布教師が、現地のプランテーション労働者の信者の便宜によってカワイ教会（現オープン教会）設置した。同様に本島大教会から派遣された男性布教師が、ホノルル教会の信者で輸入販売業を営んでいた日本人移民のD夫妻の便宜により、マウイ教会を設置する。そして、前述した移民男性Bによって、オアフ教会も設置されている。本島系統以外でも、同じく1931年に前述した周東系統の移民男性Aにより、太平洋教会が設置された。以上のように第1期は、現地の日本人移民信者の便宜によって、日本からの布教師が教会を設置し、海外布教に熱心な本島系統が優勢な時期であったといえよう。

1933年に、二代真柱一行が、シカゴで開催された世界宗教大会に出席するために渡米することとなり⁹¹、教団内でアメリカ布教の熱が高まった。それに刺激されるように、ハワイにおいても教会設置が急増していく。まず、本島系統では、1933年にカワイ教会の信者であった日本人移民女性（新潟県出身）によって、ハワイシマ教会が設置される。同年、上野作次郎の妻の津志が、カイクキ教会を設置した（後に福岡県出身の日本人移民女性が後継）。また、山口県の防府大教会では、教会長の命により分教会の夫妻がハワイへ渡り、1933年に天理日布布教所を設置している（のちのホノルル港教会）。この第2期には、本島系統を中心にハワイ現地において教会長が誕生している。それゆえ、渡辺雅子の言葉を借りるならば、「おやこ型—信徒中心万人布教型宗教」⁹²の天理教の特徴が、この時期から顕在化していったとみなすことができるだろう。

さて、天理教では海外布教が活発となり、アメリカにおいても多くの系統が布教活動を行うようになっていった。しかしながら、それが諸系統間の競合を

招き、軋轢を発生させていた。そのため諸系統間の不和を解消する必要性が高まった結果、教友会として天理教アメリカ誠心会が発足し、1934年にはアメリカ伝道庁が創設される。翌年、ハワイの各系統の教会はハワイ支部（初代支部長、上野作次郎）の傘下に入った。

アメリカ伝道庁創設後にあたる第3期にも、多くの教会が設置されていくのだが、それ以前の教会設置とは異なる特徴もみられるようになる。まず、本島系統のカワイ教会からは、1934年に熊本県出身の日本人移民男性がワイパフ教会を設置し、日本人移民女性がパラマ教会（現台壇教会）を設置する。さらに、同年に日本人移民女性（カワイ教会の初代教会長の妻）によって、セリダン教会（現キャッスル教会）も設置された（初代教会長はほどなく病気のために帰国したため、オアフ島出身の日系人女性が後継）。同じく本島系統のホノルル教会からは、1934年に前述したD夫妻の妻によって入信したオアフ島出身の日系人女性によってカカコ教会が設置され、さらには、本島系統のホノルル教会からは、前述のD夫妻の妻（福岡県出身の「呼び寄せ移民」⁹⁰）によって、ラナイ教会が1937年に設置されている。

本島系統以外では、周東系統の太平洋教会から、1935年に広島県出身の日本人移民女性がダイヤモンド教会（現パラダイス教会）を、山口県出身の日本人移民男性がワイキキ教会を、同じく山口県出身の日本人移民男性がカパア教会を、それぞれ設置している。さらに、1938年には広島県出身の日本人移民女性が、アロハ教会を設置した。また、ノースアメリカ系統⁹¹では、1936年に熊本県の宣教所から派遣された男性布教師が、移民していた親類を頼ってハワイへ渡り、ノースホノルル教会を設置する⁹²。尾道系統では、前述の日本人移民男性Cが、1938年に満天美勇（マウンテンビュウ）教会を設置している。そして、天元系統では、長崎県から満州を経て海外布教を志した女性布教師によって、1934年にパール教会が設置された。

この第3期に設置された教会群の特徴は、教団全体の海外布教の活発化に呼応するように、さまざまな系統が教会を設置していくなかで、山口県などの移民の多数送出地域の系統の教会が増加していく。さらに、就任する教会長の出身地も、日本の移民の多数送出地域である傾向が顕在化していく。このような移民の出身地を基盤とした教線の拡大のあり方は、本稿では「同郷ネットワーク型展開」と呼びたい⁹³。こうして、ハワイの天理教は教勢を拡大させ、第二

次世界大戦前には5000~6000人ていどの信者を擁するようになっていたと推測されている⁸⁹。

なお、教会長の入信の契機は、家族内での信仰継承を除けば「病気治し」が多くみられる⁹⁰。ここで重要なのは、当時のハワイの日系移民社会内部には、主流宗教であった既成仏教教団によっては満たすことのできない宗教的欲求をもった人びとが存在しており、天理教はそのようなマージナルな立場の人びとを布教対象にして、信者を獲得していったという点であろう⁹¹。

4. 第二次世界大戦後とハワイの天理教

(1) 大戦がもたらした影響

日中戦争の開戦以降、日米関係は悪化の一途をたどり、天理教の布教師の渡米も途絶えた。そのうえ日本政府による天理教への干渉も厳しくなり、天理教は国家主義的な色彩が濃くなっていった。その結果、アメリカにおける天理教の布教対象は、日系人に限定される傾向がさらに強くなる⁹²。

そして、1941年12月7日（ハワイの現地時間）、日本海軍によってパール・ハーバーが奇襲される。ハワイの日系人たちは敵性外国人とされて、日系移民社会は軍の監視下に置かれた。資産凍結、集会や夜間外出の禁止など、日系移民たちの生活は、さまざまなかたちで制限された。もちろん日系宗教の布教活動も禁止される。ハワイにおいてはアメリカ本土とは異なり、日系移民たちの大規模な強制収容は行われなかったものの、ジャーナリスト、日本語学校の教師、宗教者などの日系移民社会の指導者的な人びとが強制収容の対象とされてしまった（ハワイ日本人移民史刊行委員会1964）。教派神道に属していた天理教は、国家神道との関係性を疑われて、アメリカ政府当局の警戒の対象となった。ハワイの天理教では、教会長、布教所長、役員ら13人が、強制収容所へ抑留された。彼らの多くは、ニューメキシコ州のサンタフェ強制収容所に抑留され、教会長の1人はローズバーグ強制収容所内で死去⁹³している。次にあげるのは、ある教会長婦人が戦時体験をのちに述懐したものである。

FBIアメリカ連邦警察がきたときは会長はまだ、もんつきをつけたままでした。3人の大きな男の人たちが銃をもって拘留しにきて、FBI本部まで

連行していったのです。私はとても恐ろしくて、FBIの証明書を見せてくれとたのみました。又、会長が服に着替えてよいかをきき、着替えている間、なにかも身につけているものを検査されました。(中略)それから、今後はお社を燃やすように言われ、FBIの見ている前で全部燃やしました。その人たちは日本語で書かれた数多くの書類を全部もっていきました⁹⁹。

また、サンタフェ強制収容所に抑留された教会長の1人は、戦時体験を以下のように回顧している。

然るに1941年第二次大戦没発(ママ)と同時に抑留の身となった。12月7日町中は騒然となり、日本人は不安の内に時を過ごした。(略)10時頃に白人と2世のFBIがはいりこんで来て、そのままいいから一寸移民局へ来なさいといわれて連れていかれた。以後4年間教会は閉鎖され家内と3人の子供を残して大陸で収容される身となった。(略)ああ親神様教祖によって家族と信者6家族が戦時中教会の留守を守って頂いた。(略)この間4ヵ年信者の大半はキリスト教やほかの宗教に走り熱心な信者のみ残った(略)収容中アメリカ側から、日本へ帰りたい希望のものは日本へ送還するという話があったが、天理教の会長達は全員が日本が勝とうが負けようが、あくまでもアメリカにとどまって道の上に働く決心であった。(略)政府は天理教を国家神道と見なし、一般の人達も天理教に対する偏見の根強い中ではあったが、日米間に平和が訪ずれ、本部からは復元が打ち出され本来の天理教教義でもって布教活動を再開する事となった⁹⁹。

1945年8月に大戦は終結し、同年10月頃から抑留されていた日系移民たちは釈放されていき、天理教関係者たちも帰還し始める⁹⁹。だが、戦争によるハワイの天理教への打撃はとても大きかった。大戦中の宗教活動の停止だけでなく、教派神道に属していた同教への忌避感が日系移民社会に広がり、改宗が多数発生して信者が減少したという。例えば、筆者が調査したある教会では、大戦前は約50人いた信者が、終戦後わずか5世帯に減少し⁹⁹、また、別の教会でも大戦前は約50世帯いた信者が、終戦後には約20世帯に激減したという⁹⁹。

(2) 大戦後の復興とハワイ伝道庁の設置

大規模な強制収容が行われなかったハワイにおいては、第二次世界大戦後の日系移民社会の復興は本土に比べて急速に進む。特に日系2世たちの政財界への進出はめざましく、日系移民社会の世代交代がドラスティックに進行していった。ヨーロッパ戦線などで活躍した日系2世兵士たちの戦勝への貢献が、アメリカ社会において広く認められたことも、日系2世たちの社会進出の一助となった。そして、戦時下では抑圧されていた日系の宗教や文化も再興していった(島田2004)。また、多くの日系新宗教教団によるハワイ布教も開始されていく。

ハワイの天理教の大戦後の復興は、日本の教団本部の動向も大きく影響しながら進められていった。その復興の象徴的な例が、ハワイ伝道庁の創設である。そもそも、布教活動の効率化のためのハワイにおける伝道庁設置の要望は、戦前より現地ハワイから教団本部へ届いていたものの果たされずにいた。しかし、大戦後、二代真柱が戦前の国家神道体制下の教派神道から脱して、教祖の本来の教えに戻ろうとする「復元の理」を主張して活発な布教活動を促し、海外布教にも力を入れた(高野1975, 235)。1951年には二代真柱が、海外巡教に際してハワイを訪れる。そして、翌年1月にハワイ伝道庁の設置が認可され、同年5月に二代真柱夫妻の臨席のもとで、伝道庁設立奉告祭が開催された。

ハワイ伝道庁設置以降、伝道庁では多くの事業が開始されている。まず、伝道庁の機関紙『まこと』が1954年3月から発行されて現在に至っている。翌年からは、第2、3世代の子どもの信仰育成を目的としたサンデースクールが開始され、ラジオ放送の「天理教アワー」も開始された。1958年には、ホノルル港教会内に天理教会館柔道場が設立された。そして、従来の伝道庁が手狭となったために、1964年に伝道庁が現在の所在地(ホノルル市パリ・ハイウェイ)に移転することとなる⁸⁾。

おわりに

本稿では、ハワイにおける天理教について、その教勢が最も高まった20世紀初頭から、同教が大きな損害を被った第二次世界大戦後の復興期までの展開を考察してきた。天理教のハワイ開教の展開には、山口県などの特定の日系移

民の多数送出地域のネットワークの影響が大きかった。そのような展開のあり方を、本稿では「同郷ネットワーク型展開」と呼んだ。それは、県人会のような同郷という社会関係にもとづく相互扶助組織と同様の成立基盤であるといえる。もちろん、典型的な「チャーチ」型の教団であったハワイ本派本願寺教団なども、移民の多数送出地域である西日本に強い地盤をもっていたゆえに、大規模教団化したのであり、同様の基盤を有していたと考えられる。それゆえ、「同郷ネットワーク」とは、20世紀前半のハワイの日系移民社会における社会結合の重要な特徴であったといえよう。

ただし、マイノリティの宗教集団であるハワイの天理教は、日系移民社会の主流宗教であった既成仏教などにはみられない特徴も有していた点は注目に値する。宗教集団としての天理教は、既成仏教が担わなかった「病氣治し」などの呪術的・祈禱的行為を行って教線を拡大していった（もちろん、天理教には呪術的・祈禱的救済以外にも豊かな教えと実践がある）。天理教は、日本と同様、ハワイにおいても差別と偏見にさらされながらも、ハワイ日系移民社会の主流の宗教文化とは異なる、オルタナティブな宗教の役割を果たしていたといえよう。

本稿で示したように、既成仏教やキリスト教ではない、マイノリティの日系新宗教に注目することは、日系移民社会と宗教の関係性についてのより深い理解を可能にするだろう。ある移民・エスニック集団内にさまざまな文化や宗教が存立するなかで、エスニシティが構築されている姿を明らかにしていくためにも、支配的なエスニック・チャーチだけでなく、マイノリティである宗教集団に注目していく意義はあるのではないだろうか。

付記

本稿で用いた資料は、2005年1-2月、2006年2月、2007年2-3月および同年8月のハワイでの現地調査と国内調査にもとづいている。本稿の執筆に際して、ハワイの天理教ならびに天理大学附属天理図書館の関係者の皆様に、多大なご協力とご配慮をいただいたことを感謝申し上げたい。また、本稿は平成16-8年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

引用文献

- 藤井健志. 2001. 「移民の宗教の〈社会的形態〉とエスニシティ——台湾系仏教運動を手がかりとして」, 吉原和男/クネヒト・ペトロ編『アジア移民のエスニシティと宗教』, 風響社, 161-89.
- ハワイ日本人移民史刊行委員会. 1964. 『ハワイ日本人移民史』, 布哇日系人連合協会.
- 飯田照明. 1974. 『ハワイ伝道の曙——上野作次郎と津志』, 天理教道友社.
- 井上順孝. 1985. 『海を渡った日本宗教——移民社会の内と外』, 弘文堂.
- . 1994. 『[縮刷版] 新宗教事典 本文篇』, 弘文堂.
- . 1996. 『新宗教の解説』, 筑摩書房.
- 金子圭助. 1992. 『《伝道参考シリーズV》天理教伝道史概説』, 天理大学出版部.
- 森井敏晴. 2005. 『『天理教海外伝道』——資料を中心として——』, 私家版.
- 中嶋弓子. 1993. 『ハワイ・さまよえる楽園——民族と国家の衝突』, 東京書籍.
- 中野毅. 1981. 「ハワイ日系教団の形成と変容」, 『宗教研究』55(1): 45-72.
- 島田法子. 2003. 「ハワイにおける日系人仏教にみる文化変容とアイデンティティ」, 『立教アメリカン・スタディーズ』25: 33-51.
- . 2004. 『戦争と移民の社会史——ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争——』, 現代史料出版.
- 高野友治. 1975. 『天理教伝道史10 (海外篇)』, 天理道友社.
- 天理大学おやさと研究所編. 1989. 『改訂 天理教事典 教会史篇』, 天理教道友社.
- . 1997. 『改訂 天理教事典』, 天理教道友社.
- 天理教ハワイ伝道庁. 1957. 『天理教ハワイ伝道史』, 天理教ハワイ伝道庁.
- . 1974. 『ハワイの道』, 天理教ハワイ伝道庁.
- . 1994. 『創立四十周年記念誌 (“40th Anniversary Tenrikyo Headquarter of Hawaii”)』, 天理教ハワイ伝道庁.
- . 2006a. 『天理教ハワイ伝道庁五十年史 伝道庁史篇』, 天理教ハワイ伝道庁.
- . 2006b. 『天理教ハワイ伝道庁五十年史 管内教会史篇』, 天理教ハワイ伝道庁.

- Tenrikyo Hawaii Dendocho. 2004. *Tenrikyo Hawaii Dendocho 50th Anniversary*, Tenrikyo Hawaii Dendocho.
- 山田政信. 2007. 「グローバル化と宗教的価値の展開——ブラジルの天理教の場合」, 住原則也編『グローバル化のなかの宗教——文化的影響・ネットワーク・ナラロジー——』, 世界思想社, 180-204.
- 山倉明弘. 1999. 「天理教布教師瀬戸直一の語る戦時抑留体験」, 『天理インターカルチャー研究所研究論叢』8: 21-71.
- 柳川啓一・森岡清美編. 1979. 『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告書』, 東京大学宗教学研究室.
- . 1981. 『ハワイ日系人社会と日本宗教』, 東京大学宗教学研究室.

-
- (1) 本稿では、日本からの移民である「日本人移民」とその子孫である「日系人」の双方を包含する語として、「日系移民」を用いる。
- (2) これはアメリカ本土やカナダの日系移民研究にも共通する傾向である。
- (3) アメリカ合衆国の国勢調査によれば、1940年時点のハワイ準州の総人口は423,330人、日系人人口は157,905人である。以下のホームページを参照。
<http://www.census.gov/population/documentation/twps0056/tab26.xls> (2007年9月14日閲覧)
- (4) ハワイの日系宗教全般の状況については、柳川・森岡編(1979; 1981)を参照。
- (5) ハワイの天理教関係者の戦時抑留体験については山倉(1999)の研究がある。
- (6) 天理教の現況については、基本的に天理教ハワイ伝道庁長、教会長X氏、教会長Y氏へのインタビュー(2006年2月, 2007年2-3月ホノルル)にもとづいているが、天理教ハワイ伝道庁発行の諸資料も参照している。
- (7) Tenrikyo Hawaii Dendocho (2004, 16-18) および以下のURLを参照(2007年9月14日閲覧)。
<http://www.tenrikyo-hawaii.com/churches/> http://www.tenrikyo-hawaii.com/churches/index_002.htm
- (8) また、山田政信は、ブラジルの天理教の事例をもとに、井上の「海外出張型」と「多国籍型」の二類型に加えて、布教師(および信者)の現地への定住にもとづく「移住型」の布教形態を指摘している(山田2007, 191)。
- (9) 本稿におけるハワイの天理教の歴史記述は、特に注記のないかぎり基本的には、天理教ハワイ伝道庁(1957; 1974; 1994; 2006a; 2006b), Tenrikyo Hawaii Dendocho (2004), 天理大学おやさと研究所編(1989), 森井(2005)を参照して、筆者が構成したものである。
- (10) 筆者によるハワイ伝道庁長へのインタビューより(2006年2月ホノルル)。
- (11) 中尾善宣. 2001. 「ハワイにおける初期の布教全般について(3)」, 『天理教海外部報』第435号.
- (12) ただし、二代真柱の来布により、日系移民社会内における天理教への理解が広がった結果、布教師の活動をさまたげていた天理教への偏見や蔑視が軽減されたという記述もある(天理教ハワイ伝道庁1957, 50-51, 55)。
- (13) ハワイにおける天理教信者の最古の記録は、1899年に屋代島分教会の信者が、ハワイ島のサトウキビ・プランテーションで就労していたというものである。以下を参照。天理教ハワイ伝道庁(1994, 36), *Hawaii Pacific Press*, January 1, 1998.
- (14) 吉田進. 1978. 「アメリカ伝道概観—戦前より戦後にかけて—」, 『海外布教伝道部報』第161号.
- (15) 個人名については一部を除いて匿名とする。また、匿名としない場合は、学術論文の慣例に従っ

て敬称を略す点は容赦されたい。

- 106 中尾善宣。2001。「ハワイにおける初期の布教全般について(1)」、『天理教海外部報』第433号。
- 107 「よう(ふ)ぼく」とは、各教会に所属する信者のなかで、教団本部の「別席」において「おさづけの理」を受けた者のこと。祭儀の執行、教義の宣布、信者の強化育成を担う。また、「教人」とは、「ようぼく」であって所定の課程を修了後、教会長資格者として本部に登録された者を意味する(天理大学おやさと研究所編1997, 445)。なお、「ようぼく」と「教人」は、いわゆる「布教者」と「教師」と見なすことができるという(井上ほか編1994, 177)。
- 108 中尾, 前掲資料参照。
- 109 井上は、第2波の諸教団がハワイで広まった背景として、①「宗教生活への潜在的欲求」(天理教や金光教の信者が移民のなかにもともといた可能性)、②「祈祷的機能の需要」、③「ハワイ内での一種の社会変動の影響」の3点をあげている(井上1985, 31-32)。
- 120 片山好造の経歴と本島系統のアメリカ布教については、以下の資料に簡略にまとめられている。岡崎史朗。1998-9。「本島大教会のアメリカ初期の道について(1)-(3)」、『海外布教伝道部報』第405-406号(1998年)、第407号(1999年)。
- 121 天理教ハワイ伝道庁(1957)を参考にして筆者が分類した。
- 122 この世界宗教大会については、二代真柱じしんの日記が刊行されている。中山正善。1935。『アメリカ百日記』、天理教道友社。
- 123 渡辺雅子は、ブラジルの日系新宗教の布教形態について、「おやこ型⇔中央集権型」、「教師中心参詣型宗教⇔信徒中心万人布教型宗教」という分類軸を設定し、天理教を「おやこ型-信徒中心万人布教型宗教」に分類している(渡辺2001, 7)。
- 124 佐々木久育。1994。「海外布教伝道資料の蒐集(67) ハワイ伝道の足跡(22)」、『海外布教伝道部報』第358号。
- 125 ロスアンジェルスを中心とするノウスアメリカ教会の系統であるが、もともとは熊本県の東肥大教会の系統である。
- 126 中尾善宣。2001。「ハワイにおける初期の布教全般について(3)」、『天理教海外部報』第435号。
- 127 「同郷ネットワーク型展開」とは筆者による造語であるが、寺田喜朗氏(東洋大学東洋学研究所客員研究員)から貴重なご助言をいただいた。宗教集団の拡大においては、血縁関係(親族関係)も重要な役割を果たすが、本稿が目指したいのは、出身地域を共有するということが、移民たちの社会関係に大きな影響を与えるという移民社会の特有の性格である。なお、この類型は、宗教集団だけでなく、県人会や職業組織などの移民社会の世俗的な組織形成に関しても、適用可能な汎用性のあるモデルだと考えられる。
- 128 伝道庁長とのEメールのやりとりより(2007年6月27日)。
- 129 これは前述の井上のあげた「祈祷的機能の需要」を傍証しているといえる。
- 130 20世紀初めのハワイにおける天理教のその他の特徴としては、女性の教会長が多い点もあげられる。
- 131 吉田, 前掲資料参照。
- 132 天理教では「出直し」とされる。
- 133 『まこと』Vol.43 No.6, 1996 June, pp.16-7.(Honolulu)
- 134 『まこと』第24巻第7号(通巻274号), 1977 July, p.7.
- 135 天理教ハワイ伝道庁(1994, 8, 36)
- 136 筆者によるX氏へのインタビューより(2006年2月ホノルル)。また、山口県の防府系統の同教会では、戦前は移民の多い山口県出身の信者が中心であったが、大戦の終結直後に復帰した信者たちは沖繩系の人びとであったという。
- 137 筆者によるY氏へのインタビューより(2006年2月ホノルル)。
- 138 井上護国。1968。「ハワイ伝道庁移転記」、『陽気』昭和43年7月号。